

【調査報告】

## アメリカのメリーランド州モンゴメリー郡における 障害児教育に関する調査報告

### Report on an Investigation on Special Education in Montgomery County, Maryland, USA

竹 沢 昌 子

#### 要旨

特別支援教育が2007年にスタートし、障害の有無によって分け隔てることなく、すべての子どもが共に学び合うインクルーシブ教育の基本方針が示された。とはいえ、小・中学校の通常学級において、障害児の特別な教育ニーズに必要な合理的配慮や発達の保障がどのように実現されるのか、十分に明らかにされていない。

本稿は、筆者が2014年9月に、アメリカのメリーランド州モンゴメリー郡の公立学校の自閉症児クラス、読み書きに困難のある児童生徒のための私立学校、学習や認知などの面に困難を抱えるクライアントの評価を行う教育コンサルタントのオフィスを訪問した際の調査報告である。訪問の目的は、モンゴメリー郡の障害児教育の現状と課題を知り、日本の障害児教育との比較において理解することであった。

調査結果から、日本の障害児教育に関連して、4つの課題が示唆された。第1に、インクルージョン (Inclusion) の考え方に基づいて、障害児教育をどのように制度設計していくべきかである。第2に、インクルーシブ教育の考え方を具体的に実現していく前提として、個々の障害特性に合わせて教育プログラムをどのように開発していくべきかである。第3に、障害児クラスの授業展開において、日本内外の実践の効果、限界、改善点からどのように学び合うことができるかである。第4に、障害児教育に関わる支援者の専門性の確保と支援者間の協力体制をどのように実現するかである。

キーワード：障害児教育、インクルージョン、インクルーシブ教育、特別支援教育

#### I はじめに

サラマンカ宣言 (ユネスコ, 1994年) は、障害の有無によって分け隔てることなく、子どもたちが可能な限り同じ教室で学ぶなかで、さまざまな能力や個性をもつ人々が共に生きる社会へ向かうとする国際的な目標を設定した。

日本においては、2007年に特別支援教育がスタートし「障害の有無にかかわらず、すべての子どもは地域の小・中学校の通常の学級に就学し、かつ学籍をおくことを原則」<sup>(1)</sup>とするインクルーシブ教育の基本方針が示された。しかし、小・中学校の通常学級において、障害児の特別な教育ニーズに必要な合理的配慮や発達の保障がどのように実現されるのか、十分に明らかにされていないわけではない。障害児も健常児とともに通常学級で学ぶ

べきとの意見の一方で、「その障害に起因する特別なニーズに的確に対応できる多様で柔軟な教育のしくみが必要」との主張もある<sup>(2)</sup>。

アメリカにおいては、1990年に障害者教育法 (The Individuals with Disabilities Education Act, IDEA, 1997年, 2004年に改正) が制定された。この法律は、できる限り制約の少ない環境 (The Least Restrictive Environment, LRE) において、無料の適切な公教育 (Free Appropriate Public Education, FAPE) を提供し、児童生徒一人一人の教育ニーズに応じた個別教育プログラム (Individualized Educational Program, IEP) を策定することを義務づけた。

筆者はアメリカのメリーランド州モンゴメリー郡を2014年9月に訪問した。訪問の目的は、モンゴメリー郡の障害児教育の現状と課題を知り、日本の障害児教育と

の比較において理解することであった。モンゴメリー郡は首都ワシントンD.C.の北に隣接し、ワシントンD.C.の南に位置するバージニア州フェアファックス郡などを含めて、ワシントン・メトロポリタン・エリア（いわゆる首都圏）を形成している。

モンゴメリー郡において訪問したのは、次の3ヶ所である。第1に、郡の公立学校の一つであるカーディロック・スプリングス小学校（Carderock Springs Elementary School）<sup>(3)</sup>にある自閉症児クラス、第2に、読み書きに困難のある小学生から高校生のための私立学校シエナ・スクール（The Siena School）<sup>(4)</sup>、第3に、学習や認知などの面に困難を抱える子どもや大人の評価を行う教育コンサルタントのオフィスであるスティックスルード・グループ（Stixrud Group）<sup>(5)</sup>である。本稿は、これらの訪問の調査報告である。

## II カーディロック・スプリングス小学校への訪問について

### 1 メリーランド州モンゴメリー郡における障害児教育の概況

メリーランド州モンゴメリー郡には、公立小学校（1年制の幼稚園が併設されている）133校、同中学校38校、同高等学校26校の通常学校が設置されている。そのほとんどの学校において、何らかの障害に対応した教育プログラム（Special Education）が提供されている。例えば、知的障害・聴覚障害・言語障害・視覚障害・情緒障害・身体障害・虚弱・学習障害・自閉症などの障害に対応したプログラムである。

これらのプログラムを担当する教員は、障害児教育の分野で修士課程を修了していることが推奨されている。各学校には、障害児クラスの担当教員以外に、リソースティーチャー（resource teacher）と呼ばれる特定の科目のみを担当する教員が配置され、障害児の教育ニーズに合わせた個別指導を行っている。また、主に言語の訓練を行うセラピストがすべての学校に配置されている他、それぞれのプログラムのニーズに応じて学校に作業療法士や理学療法士が配属されることもある。さらに、モンゴメリー郡より各学校にコーディネーターと呼ばれるスーパーバイザーが毎週2回派遣されている。コーディネーターは障害児クラスを訪問し、授業の様子を視察して、教員に対して必要な指摘やアドバイスをを行う。

これらの通常学校とは別に、かなり高度な支援が必要な障害児のための学校（Special School）5校が設置されている。また、乳児から4歳児までの障害児をもつ家族を対象にしたプログラム、3歳から5歳までの障害児を対象としたプログラム、高等学校卒業後の自立に向け

た職業訓練などを行う移行サービスなども提供されている。

### 2 カーディロック・スプリングス小学校における障害児教育の概要

カーディロック・スプリングス小学校は、中産階級以上の比較的裕福な家庭の多い閑静な住宅街に位置している。全校児童数424名（2013～2014年度）のうち、白人が7割を占め、英語を母語としない児童の割合は5%以下と小さい。つまり、移民の少ない地域である。注意欠如多動性障害（AD/HD）<sup>(6)</sup>や学習障害（LD）<sup>(7)</sup>など、スペクトラム上にある障害児は15名ほどおり、リソースティーチャーによる個別指導を受けながら、通常学級に在籍している。

一方、知的な遅れをとともなう自閉症児のために3クラスが設置されており、19名の児童が特別な支援を受けている。これらのクラスは、後に述べるように、自閉症児のために構造化された環境であるといえる。自閉症児のクラスの内訳は、幼稚園生と1年生の7名のクラス（担任1名、補助教員3名）、2年生から4年生の6名のクラス（担任1名、補助教員2名）、5年生の6名のクラス（担任1名、補助教員2名）である。自閉症児の場合、児童2名に教員1名の配属が原則であり、また1クラスの児童の定員は最大7名までとなっている。これらの児童のために、3台のスクールバスが学区のそれぞれの地域で送迎を行っている。自閉症児の教室は、学校の正面玄関に入ってすぐの事務室から最も近い3教室である。

筆者が訪問した月曜日のスケジュールは、表の通りである。

カーディロック・スプリングス小学校 月曜日の予定

9時	到着
9時15分	朝の会
9時30分	小グループによる個別授業
11時	社会／理科
11時半	昼食
12時半	ライティング／作業
13時	メディア
13時半	算数
15時	おやつ
15時20分	帰宅の準備

### 3 自閉症児クラスの様子

筆者が滞在した午前中の活動（「朝の会」から「小グループによる個別授業」まで）について報告する。

各教室には机があちこちに置かれており、いわゆるスクール形式型ではなかった。それぞれの児童の座席は、各自の教育ニーズに応じて決められており、1～3名ずつ少し離れた別々の椅子に着席した。2～3名で課題に取り組むことができる児童もいれば、教員との1対1の中で取り組む児童もいるためである。9時15分からの「朝の会」では、まず、担任が児童の名前を呼んで「おはよう」と声をかけながら、その日の予定をコンピューターに打ち込んでいた。打ちこまれた文字は、同時にアクティブボードと呼ばれる大きなスライドに映し出された。口頭による説明に加えアクティブボードを活用する意図は、児童が視覚によって予定を確認することができるということにあった。

予定の確認後、教員が児童たちに、前日やその日の朝の出来事に関する質問を始めた。この段階から、児童1～3名ずつの小グループごとの活動になり、それぞれのグループに教員1名が着席した。教員が「昨日は何をしたの?」「今朝は何を食べたの?」などと尋ね、問いに見合った答えを児童たちから引き出そうとしていた。ごくありふれた日常的な話題を会話にすることで、児童にソーシャルスキルを身につけさせようという意図があるとのことだった。

朝の会が終わると、あっという間に2分間の休憩時間になった。児童はそれぞれトランポリンやバランスボールに乗ったり、ミニカーで遊んだり、パソコンに向かったり、と自分の好きなことを始めた。休憩時間の目的は、「朝の会」にがんばって参加したことを労い、たった2分間であっても児童たちが自分の好きなことをすることで、気持ちをリセットすることであった。

9時30分からは、小グループによるワークが始まった。「ワーク」と呼ばれているが、実質的には個別授業であった。「朝の会」のときと同じように、児童1～3名に1名の教員が担当していた。教員がカードを使って児童に質問し、即答を促す、という問答を繰り返していた。1名の教員が1～3名の児童に同時に質問するグループもあれば、1名の教員が1名の児童に質問をした後に交代で別の児童に質問するというグループもあった。児童一人一人の教育ニーズに応じた方法を採用しているのだという。

#### 4 自閉症児クラスの授業展開の原則について

自閉症児クラスでは、活動や授業がいくつかの原則に基づいて展開されていた。ここでは、筆者が教室内で観察し、その後、担当の教員から説明を受けた4つの原則について報告する。

##### 1) 間違えさせない教え方 (Errorless Teaching)

第1に、「間違えさせない教え方 (Errorless Teaching)」である。教員が「アイスクリームを食べている少女」が描かれているカードを児童に提示し、「彼女は何かをしているのかな?」と尋ねた。ある児童が「アイスクリーム」と答えた。教員は児童の答えを否定せずに、すぐに「彼女はアイスクリームを食べています」と全文を伝え、さらに児童に正しい発音で全文を言うようにと促した。

もし教員が「いいえ、アイスクリームだけでは答えになっていませんよ」などと伝えたとしても、自閉症児が正解を答えられるわけではない。「違うでしょ」のように否定的に言われたら、自閉症児は「自分の答えが否定された」とだけ受け止めかねない。つまり「間違えた⇒叱られた」という「負の強化 (Negative Reinforcement)」になりかねない。したがって児童に間違えをさせない形で、教員が正しい解答を導く。そして児童が正しい答えを述べることであれば、教員は「よくできたね」と児童を褒めることが効果的であるという。

##### 2) 2秒ルール (Two-Second Rule)

第2の原則は、「2秒ルール (Two-Second Rule)」である。教員の質問に対し、児童が集中していなかったり、答えられなかったりしたら、2秒を超えないうちに、教員はもう一度質問を繰り返したり、正解を伝えるというルールだという。つまり、教員は児童の反応をあえて待つことをしない。これは、児童の意識が集中しない時間を長引かせず、児童の意識を質問に向けさせ、あくまで児童の行動に着目することを優先する方法だという。

先に紹介したように、「アイスクリームを食べている少女」の絵に対して、児童が「アイスクリーム」とだけ答えた場合、教員は即座に「彼女はアイスクリームを食べています」と正解を伝えていた。そして、児童に「全文を正しく言う」という行動を促していた。

##### 3) 児童の意識を集中させること

第3の原則は、児童の意識を集中させることである。自閉症児は自分だけの世界にこもったり、独り言を言ったりして、今、取り組むべき課題に集中しないことがある。そのような場合、教員は「手をたたいてごらん」「自分の鼻を触ってごらん」などと言って、児童の意識を課題に戻ってこさせるための声かけを行っていた。筆者の訪問中、児童は教員の声かけによって、今やるべきことに意識を戻して課題に取り組む姿を何度も観察することができた。

##### 4) 正の強化 (Positive Reinforcement)

第4に、児童が1つの課題をやり遂げた後に、何らかのご褒美を提供することである。これは先に挙

げた「負の強化」の逆である「正の強化 (Positive Reinforcement)」の原理を活用した方法である。「正の強化」の基本は、褒めることである。つまり、教員が「よくできたね」と児童を褒める。児童にとって、「よくできた⇒褒められた」という「正の強化」になる。褒めることの他に、キャンディをあげる、その児童の好きなことをさせるなど、より実利的な褒美を提供することもあるという。

筆者が訪問した際に特に印象的だったのは、何時間でもコンピューターに向き合っていた「パソコンおたく」の少年に対して採られていた方法であった。この少年にとって、ワークに取り組むことは耐えがたい苦痛のようだった。教員は少年がワークに集中できない様子を見て、「あなたは何のためにワークに取り組むの？」と質問した。少年は「コンピューターで遊ぶため」と答え、その目的のために、どうにか2分間のカードワークに取り組んだ。教員が「よくがんばったね。コンピューターで遊んでいいよ」と言うと、少年はパソコンに駆け寄り、1分間のパソコン・タイムが与えられた。

このように、集中して取り組むことが苦手であり、ずっと座ったままでは勉強できない自閉症児に対しては、2分間のワークに続いて1～2分間の遊びの時間（褒美）を繰り返していた。教員はタイマーを片手に計時し、遊びの時間が終わると、児童に声をかけて活動に戻ってくるように促していた。

## 5 まとめ

カーディロック・スプリングス小学校では、自閉症児だけに限定したクラスを設置し、その特性に合わせてクラス運営を行っていることが印象的であった。机の配置や時間の使い方、また、負の強化を避け、正の強化を高めるためのさまざまな工夫など、自閉症の特性に適した教育を行っていた。また、一人一人の児童に合った教材や関わり方によって徹底した個人指導を行っていた。秩序ある構造化された環境のなかで学習を繰り返すことにより、児童が好ましい態度や行動を身につけることを目標としていた。

## III シエナ・スクールへの訪問について

### 1 シエナ・スクールの概況

シエナ・スクールは、モンゴメリー郡に2006年に設立された私立学校である。この学校は、読み書きに軽度の障害があり、かつ将来、大学進学を目指す小学校4年生から高校生の約80名が在籍している。そこでは、児童生徒をいわゆる「学習障害 (Learning Difficulties, LD) のある子ども」ととらえるのではなく、学力はあるもの

の「学び方の違う子ども (Learning Differences, LD)」との視点に立ち、教育を進めている。学習の内容や方法を豊富に準備し、個人の能力や特性に合わせて提供しているのである。

シエナ・スクールでは、入学者を選抜するにあたり、児童生徒の言語能力全般に着目して数多くの評価を行いながら、スクリーニングしていくという。読み書き障害以外の障害を併せもち、また大学を目指すことができる程度の知的能力が認められない場合、入学は許可されない。例えば、注意欠如多動性障害や高機能自閉症など、行動や感情面で困難を呈する子どもたちや、軽度の知的な遅れのある子どもたちは、本校の対象とならない。学校長は、「そのような子どもたちを教育することは、私たちの役割ではない」と度々発言していた。対象となる児童生徒の障害特性を限定し、彼らの教育ニーズに最も適切な教育を提供することこそ、自分たちの役割である、とのことであった。

### 2 シエナ・スクールの教育の特徴

シエナ・スクールの教育の特徴として、3点紹介する。第1に、大学進学を目指すべく、児童生徒の高い学力を保持していることである。シエナ・スクールは全米のカリキュラム共通基準 (Common Core Standards) を採用しており、学年ごとの到達目標に基づいて授業を展開している。学力には問題ない児童生徒たちを対象としているため、大学進学という高い目標を掲げているのである。

実際にシエナ・スクールの卒業生はすでに大学へ進学している。大学進学の際、伝統的な学問分野を専攻することは少なく、どちらかというと職能的な分野（写真術、エンジニアリングなど）を専攻する傾向にあるという。なぜなら職能的な分野の方が彼らの強みを生かせることが多いからであるという。とはいえ、一般の大学内に設置されている学習支援センターのサポートを借りながら、勉強している卒業生もいるという。

第2に、言葉を操ることに困難を感じている児童生徒たちのために、複数の方法によって言葉の教育を行っていることである。多様な感覚を使って言葉を理解させることが基本であり、読むこと・聞くこと・見ること・書くこと・触れること・動作などが含まれる。また、読み方を教える方法論として、オートソーティング・アプローチ (The Orton-Gillingham Approach)、リンダムードベル・ラーニング・プロセス (Lindamood Bell Learning Process)、ウィルソン・リーディング・システム (Wilson Reading System) の3方法を採用している。

学校長は、私立学校であるシエナ・スクールと公立学校の教育の違いを説明してくれた。シエナ・スクールと

は異なり、モンゴメリー郡の公立学校は上記3つの方法論のなかでウィルソン・リーディング・システムのみを採用しているという。しかも、公立学校の教員は教授法のトレーニングを十分に受けていないという。一方、シエナ・スクールには、十分なトレーニングを受けた読み方を専門に教える教員（reading teacher）がおり、それぞれの方法論に精通している。教員は、一人一人の児童生徒に必要な適切な方法を組み合わせながら、読み方を教えていくという。

第3に、児童生徒たちの芸術的な取り組みに力を入れていることである。言葉を操ることに困難をもつ子どもたちは、一般に芸術の分野で才能を見出すことが多いという。自分の才能を高めることで子どもたちは自信を深め、勉強の分野でも能力を発揮する傾向があるという。学校内の壁に飾られている児童生徒による絵画や写真は、どれも芸術性の高い作品ばかりであった。

### 3 クラスの様子

各クラスともに、1名の教員が10名弱の児童生徒を担当していた。知的な遅れや問題行動のない子どもたちであるために、これらの児童生徒に読み書きの障害があることすら感じにくかった。注意深く観察すると、学んでいるのは母語としての英語であるが、絵カードを使ってあたかも外国語を初めて学んでいるような光景や、積み木を使って分数を学ぶ光景を見ることができた。絵カードや積み木を使うのは、多様な感覚を使って学習効果を上げるためである。

スペイン語の授業では、生徒が一人1枚ずつ小型のホワイトボードを手にしていた。教員からの質問に対して、まずホワイトボードに答えを書いてみるのだという。もしスペルを間違えて書いてしまっても、すぐに消すことができるのが利点だという。まず書いてみる、そして間違ったら消す。これを繰り返すことで、ミスすることを恐れずにチャレンジする気持ちを高めているという。

### 4 まとめ

シエナ・スクールは私立学校だけあって、入学生を厳格にスクリーニングしていた。彼らに対する個別的かつ専門的な教育は徹底しており、一人一人の強みを最大限に伸ばすことを目標としていた。似たような障害特性や知的能力をもつ児童生徒の集団であるために、彼らは落ち着いた雰囲気の中で安心して学び、楽しみながら学校生活を送っているように見受けられた。

## IV スティックスルード・グループ（教育コンサルタントオフィス）への訪問について

### 1 スティックスルード・グループの概要

スティックスルード・グループは、神経心理学者や臨床心理学者による教育コンサルタントのオフィスである。学習障害や注意欠如多動性障害、認知や感情などに困難を抱える子どもや大人の評価を行っている。同団体は、こうした障害や困難を抱える個人への評価およびこれらの人々への支援を行っている公的・私的の団体（学校など）を対象としている。主に学習上あるいは社会生活上の困難を抱えるティーンエイジャーまでの子どもを対象に、さまざまな検査や面談を行い、何が問題なのか、何が強みなのかを明らかにし、今後どうしたらよいかを提案している。

同団体が行うのは神経心理学に基づいた評価の部分だけであり、評価後のカウンセリングや治療は行っていない。神経心理学の分野の発達は著しいため、それ以外のことにまで関わろうとすると、より専門的な評価を行っていくことが困難になるという。評価以外の支援については、関係者・関係機関とネットワークを組んでいるおり、必要に応じて、精神科医・セラピスト・作業療法士・家庭教師などを紹介している。

また、契約先の一つであるモンゴメリー郡やワシントンD.C.の公立学校からの依頼により、児童生徒の個別教育プログラム（IEP）の策定のために、学校主催の会議に参加することもある。その際には、児童生徒の教育を受ける権利を擁護するために、「教室内でこのような工夫をしてほしい」などと具体的な配慮のあり方について提案することもある。

### 2 スティックスルード博士との面会

スティックスルード・グループの代表であるスティックスルード博士と面会することができた。面会は、スティックスルード博士による同団体の概要の説明（「IV-1 スティックスルード・グループの概要」参照）の他、筆者からの質問に対して博士が回答する、という形で進められた。博士の主な回答内容は、以下の通りである。

#### 1) 公立学校で採用されている「正の強化」や「2秒ルール」について

これらの方法は、数多くの実証研究によって、自閉症児が望ましい行動様式を身につける上で効果的であると証明されている。とはいえ、これらの方法が唯一ではないし、ベストでもない。これらの方法は、どちらかというとな大人の主導によって行われており、子どもの自主性を育てるとは言い難い。子ども主体の方法、例えばフロ

アタイム・アプローチ (Floor-Time Approach) を取り入れながら、子どもの内的な動機を高めるような関わりも必要だと考える。

### 2) 学習障害や注意欠如多動性障害, 認知や感情などに困難を抱える子どもたちの大学進学について

全米で大学の学位をもっている者は, 国民の3割しかない。残りの7割は高校卒業後, 社会人となっている。この数字が物語っているように, 障害のある子どもにとって大学進学を唯一の目標とするには, 無理がある。学習障害や注意欠如多動性障害, 認知や感情などに困難を抱える子どもにとって, 高校卒業直後の18歳の段階で大学へ進学するには, 準備ができていないことが多いからだ。

しかし, ワシントン・メトロポリタン・エリアには, 高学歴で裕福な家庭が多いために, 自分の子どもを大学に進学させたいと願う保護者が多い。本人も保護者も, 高校在学中に職業訓練のプログラムを受講する, コミュニティカレッジに行ってから職能的な仕事を探すなどの選択肢があることを知り, 何をやる上でどの程度準備ができていくかどうか, 正しく把握する必要がある。

### 3) インクルージョン (Inclusion) の考え方について

アメリカでは1960年代の公民権運動を背景に, インクルージョン (Inclusion) の考え方が広まった。とはいえ, 何らかの障害をもつ児童生徒が健常児と同じ空間で学ぶことについては, 慎重に考える必要がある。障害児教育 (Special Education) にはお金がかかる一方で, インクルーシブ教育は安上がりだ。障害児が大きな集団に入れられることで, 障害児の学ぶ権利はどうなるのか, よくよく考えなければならない。

## 3 まとめ

スティックスルード博士は, 公立学校の「正の強化」や「2秒ルール」の取り組みは不十分であること, 私立学校の大学志向には無理があること, インクルージョンの考え方は障害児の学ぶ権利を侵害しかねないことなどを語ってくださった。これらのことから, 学習面や生活面で何らかの困難を抱える子どもたちにとって, 学校教育や将来のキャリア・プランニングはどうあるべきなのか, 改めて考える機会になった。

## V 全体まとめ～訪問をふりかえって

これらの教育現場や支援団体を訪問して, 以下の4つの研究課題が浮上してきた。

第1に, 障害児教育のあり方である。公的機関の関わり

り方や予算配分などを含む障害児教育の制度設計である。具体的に言えば, 日本社会においてインクルージョン (Inclusion) の考え方をどのように定着させていくのか, 障害児も健常児もお互いに排除せずに, しかもそれぞれの特性にあった環境で教育を受ける環境をつくるのか, そのための研究と実践が求められる。

第2に, 障害の特性に対応した教育プログラム (カリキュラム) の開発の緊急性である。多様な障害があるなかで, 冒頭で述べたインクルーシブ教育の考え方を具体的に実現していく前提として, 個々の障害特性に合わせた教育プログラムが準備されていなければならない。例えば, 大学での専門性あるいはコミュニティカレッジでの職能性などに関連する能力, あるいは社会人として就労する際に必要な能力に着目して, 中等教育までの教育機関でのいくつかのカリキュラムが想定できる。まずはそれぞれの学校において個別の具体的な教育プログラムがどのように実践されているのか, 現状を把握することが緊要である。このようなプログラムが紹介されることにより, 個々の教育機関に在籍する子どもに対応したカリキュラムを組み立てることへと発展していくであろう。

第3に, 障害児クラスでの授業の展開方法である。クラスでの実践方法となれば, 教育現場では多種多様な努力がなされているであろう。日本国内での実践例の研究と諸外国, ここでは米国国内での実践例の研究との比較を行うことにより, 障害児教育の全体像を把握することができる。さらに, 個々の実践の効果・限界・改善点などを学び合うことができるであろう。

最後に, 障害児教育に関わる支援者の専門性の確保と支援者間の協力体制である。障害児教育を担当する教員の専門性をどのように担保するのか, 教員以外の専門職をどのように配置するのか, 学校外の関係機関がどのように専門性を高めていくのか, そして, 学校内外の支援者がどのように連携し, 協力していくのか。障害児教育の制度設計において, 評価・教育・治療・支援などのネットワークの構築がさらに求められる。

こうした取り組みの紹介として, この報告がその一助となればと思う。

### (注)

- (1) 内閣府 障がい者制度改革推進会議 第12回資料「障害者制度改革の推進のための基本的な方向(第一次意見)」, 2010年
- (2) 文部科学省 特別支援教育の在り方に関する特別委員会 第8回資料「すべての視覚障害児の学びを支える視覚障害児の学びを支える視覚障害教育の在り方に関する提言 視覚障害固有の教育ニー

ズと低発生障害に応じた新しい教育システムの創造に向けて」, 2010年

- (3) 7401 Persimmon Tree Lane, Bethesda, MD 20817
- (4) 1300 Forest Glen Road, Silver Spring, MD 20901
- (5) 8720 Georgia Avenue, Suite 300, Silver Spring, MD 20910
- (6) 日本精神神経学会は, 2014年より, 「注意欠如多動症」と改めた。
- (7) 日本精神神経学会は, 2014年より, 「学習症」と改めた。